

媒介項としての哲学的人間学

前回は、生命倫理における新たな実存思想の可能性について示唆した。今回は、そのことについてもう少し掘り下げてみたい。その際、媒介となるのが哲学的人間学 philosophische Anthropologie, philosophical anthropology である。哲学的人間学は、「人間とは何か」という形で人間の本質を哲学的に問いつつ、自然界もしくは宇宙における人間の地位を確定することを目指す。これは、20 世紀前半にシェラーやプレスナーによって確立された比較的新しい哲学領域である。時期的には、キルケゴールが実存哲学という形で 1 世紀ぶりに復活してくる直前にあたり、ヤスパースやハイデガーはそれぞれの立場から哲学的人間学を批判的に取り上げている。

Anthropologie, anthropology は人類学とも訳される。いや、むしろこの人類学という訳のほうが一般的である。人類学は、その名の通り、人間を研究する際、個々の人間存在というよりも、全体としての人間(人類)を取り上げるところに特徴がある。人類学という言葉で、多くの人がまず思い浮かべるのは、人類の祖先の姿勢やその進化を化石人骨から解き明かそうとする化石人類学ではないだろうか。これは自然科学的に人間を研究する自然人類学である。一方、人類の祖先の生活やその思考を未開社会の人々の暮らしから探り当てようとするのが、文化人類学の出発点にあった。

自然人類学や文化人類学が経験科学の方法に基づくのに対して、これらの成果を踏まえつつ、議論の主要な部分の人間探究が哲学的方法でなされるのが、哲学的人間学である。哲学的人間学は、しばしば他の動物との比較において種としての人間(人類)の独自性(人間の本質)を説き明かそうとする。実存哲学からの批判の鋒先もそこに向けられている。その意味で言うならば、philosophische Anthropologie は哲学的“人類学”と訳したほうがより正確なところである。実際、中国語では「哲学人類学」と訳されている。

哲学的人間学という呼称は、日本独自の表現である。それは、日本語の人間学という言葉には、人間としての主体的な生き方及び人生観的な含意があるからだけではない。原語の philosophische Anthropologie 自体においても、必ずしも哲学的“人類学”に回収されない固有の意味内容を有するからである。例えば実存哲学を批判的に吸収したベルジャーエフやブーバーなどがそうであり、彼らの思想は実存的な哲学的人間学とも言ってもよい。それは他ならぬ私や他者という個別的な人間存在において、人間が人間であることの普遍的な本質を問い深めていくものとなっているからである。

生命工学による人間存在の危機

人間は誰もがホモサピエンスという同じ人類の一員である。この普遍的な本質を支える生物学的な基盤が、生命工学によって改変されるとしたらどうであろうか。すでに遺伝子工学によって、人類は遺伝子を組み換えた農作物や家畜や実験動物を造り出してきた。人類がこの技術を人類自身にも適用したら、一体どうなるであろうか。

遺伝子組み換え技術を用いて、特定の病気にかからない遺伝

子を組み込んだ人間を造ることが可能であるとしよう。医療としての安全性が確保されたならば、遺伝子レベルでも予防医療が実用化することが予想される。こうした予防医療が治療の一環として許されたならば、さらに一步進んで、頭脳的にも体力的にも優れた人間の強化改良だって認められないだろうか。人の親ならば、誰もが自分の子供には頭が良くてスポーツもできるようにってほしいと望むではないか。遺伝子レベルで人間を強化改良できる医療技術が可能になった時、それを用いて優秀な我が子を産むことに誰が反対できるだろうか。

リー・M・シルヴァーは分子生物学と生物進化学が専門であるが、彼は人間の遺伝子改良が普及した西暦 25 世紀の世界を次のように想像的に描く⁽¹⁾。この世界には、遺伝子工学により知力や体力などあらゆる面で強化されたジーンリッチの人間と、そのような強化や改良を受けていないナチュラルの人間とが混在している。ジーンリッチは、知力や体力において圧倒的にナチュラルよりも優勢であり、一握りのジーンリッチが人口の大半を占めるナチュラルを支配下においている。しかも、同じ“人類”でありながら、ジーンリッチとナチュラルとでは遺伝子の差が違いすぎ、両者の間での交配がもはや不可能な状態に至っている。両者の格差は、単なる社会的階層の差ではなく、生物学的優劣の差としても固定されているのである。ホモサピエンスという一つの種だった人類は、いまや進化型と旧来型の二つの人類に分裂してしまったのである。

シルヴァーの想像はまだ続くのだが(遺伝子改良企業が 3 社に寡占化されてジーンリッチも 3 種類になる、地球環境悪化に対抗するため光合成を可能にする遺伝子が人間にも組み込まれる等)、バイオテクノロジーが無際限に人間に適用されていくなれば、予測もつかない人類の大変革が行われることにもなりかねない。

一つの種としての人類の生物学的統一があって、人間である限りの人間の尊厳も成り立つ。しかし、この統一が崩壊しているところでは、人間の尊厳もまた崩れ去ってしまうのである。

実存哲学と哲学的人間学との共働

キルケゴールは、我々一人ひとりが単独者であるとも説いた。そのことが可能なのは、我々が皆同じ人間であるという本質を有するからにほかならない。人間が生物学的に同一のホモサピエンスであることは、さながら金太郎飴のように、どんな人間においても共通する特質である。個々の人間はかけがえない独自の存在であるが、同時に人類の一員として普遍的に共有する本質を持つ存在なのである。生命工学の進展は、ともすればこのような人間存在の基盤を切り崩してしまう恐れがある。そうした問題が先鋭的に問われるのが、21 世紀及びそれ以降の生命倫理の場面である。哲学的人間学は、生命倫理の領域において、一つの種としての人類という基盤を守り抜くという役割を担う。そして、この基盤こそ人間の個の実存の成立根拠でもあるがゆえに、実存哲学は哲学的人間学とこれからは共働していくことが求められる。誰もが単独者なのは、誰もが同じ人類の一員なのだから。

[註]

(1) リー・M・シルヴァー『複製されるヒト』(東江一紀・真喜志順子・渡会圭子訳、翔泳社、1998 年) 参照。